

派遣の想い出

理事長 森 勉

平成3年の湾岸戦争で我国は、お金を出すが国際社会の一員として相應の汗を流さないという厳しい非難に対応するため、同年4月自衛隊法に基つき海自の掃海部隊をベルシャ湾に派遣した。引き続き平成4年6月国際平和協力法を制定し、同年9月陸自の8名の停戦監視要員と600人の施設大隊をカンボジアPKOに派遣した。

カンボジアPKOは国連の權威と軍事力が持つ抑止力を後ろ盾として、武力を行使しないことを前提に停戦合意が成立した両者の間に割って入り、平和を維持するものである。

陸自にとつては、世論が激しく対立する中、準備期間が3ヵ月という厳しい状況下での初めての海外派遣であった。約6ヵ月で部隊交代をして、翌年9月無事任務を終了し撤収した。

いくつかの思い出を紹介する。PKOの主役たる停戦監視要員は成田空港出発時、空港職員から「皆さんの着用している制服はどんな団体ですか」と驚くべき質問を受けた。一方、国連が提供した外国便の機内では機長から、

カンボジアの停戦監視という崇高かつ困難な任務に赴かれる方々をその様な席に乗せられないと言われ、上のクラスの席を提供された。

次に統合運用について。施設大隊の人員・装備等の輸送を担当した海自の艦艇3隻は、10月初旬カンボジアのシアヌークビルに入港し、輸送任務を完了した後も、施設大隊が体制を整えるまで港に停泊し、支援後援としての役割を果たした。又空自はC-130輸送機で施設大隊の輸送支援を実施した後も、毎週1回程度現地との間に連絡便を運行し後方連絡線を維持した。

海・空自の温かい配慮は海外に初めて部隊を展開した陸自にとつて、また現地で活動する部隊・隊員にとつて、心強い支えであった。このことはその後の統合運用体制移行への原動力になったものと確信している。

カンボジアPKO派遣から四半世紀、自衛隊は各種の国際貢献活動等に参加し国内外から一定の評価を獲得した。海外派遣が常態化する中、幸いにも不測事態は過去に一度も無く、国際貢献活動に安全神話のようなものが出来ている。万一不測事態が生じた場合、国民が冷静にそして適切に対処してくれることを切に願うものである。